子規・露月と格堂

柴田奈美

要約

「俳星」三代主幹を務めた格堂が、どのような文芸的な交流を、初代主幹の石井露月と深めたのかを、子規との関係も視野に入れて明らかにした。考察の結果、心をうちとけて通わせるような交流は、格堂と露月の間には存在しなかった。ただし、格堂の方は初めて露月を知って以来、畏敬の念をもって接していたと考えられる。格堂と露月の文学的交わりの最も深かったと推察されるのは、格堂の主宰した政治雑誌「青年日本」への露月の協力であった。

〔キーワード〕格堂・露月・子規・「俳星」「青年日本」

はじめに

赤木格堂は、平賀元義を子規に紹介した晩年の高弟として有名であるが、近年まで格堂自身の文学活動については、ほとんど公には知られていなかった。

子規没後は文芸活動から遠ざかったと見なされてもいたが、明治三十七年以降断続的に俳句等の文芸作品も発表され、俳壇においては子規直系の弟子として重んじられていたことは、既に明らかにした（注1）。

特に、子規の生前の明治三十三年三月に、正岡子規の命名で石井露月が創刊した（注2）「俳星」の第三代主幹まで務めていたことは、「俳星」以外の人々には、ほとんど知られていなかったことで、格堂の大きな文芸活動の一つとして挙げられてよい（注3）。

本稿では、「俳星」三代主幹を務めた格堂が、どのような文芸的な交流を、初代主幹の石井露月と深めたのかを子規との関係も視野に入れて明らかにしたい。

一、子規と露月

明治六年五月十七日に、露月は秋田県河辺郡雄和町女米木の農家の二男として生まれた。文学少年として成長し、明治二十七年春、文学で身を立てようとして坪内逍遙の門を叩くが、文学の道の厳しさを説かれて、入門を断られた。まもなく子規の従弟藤野古白らの紹介で、子規と知り合い、その斡旋によって「小日本」に入社した。そして、子規の指導の下で句作に励み始め、「小日本」廃刊後は「日本」に入社した。

幼少の頃から身につけた漢籍の素養が句作に役立ち、「明治二十九年の俳句界」の中では次のように子規に大きく評価されている。

「碧虚の外に在りて昨年の俳壇に異彩を放ちたる者を露月とす。

露月喜んで漢語を用うれども用語自ら碧虚に異なり」「漢詩、漢史より来りし語多く従つて支那の事物を詠じたることも多し。是れ碧虚の知らざる所なり」（「日本」明30・2・21『子規全集』第四巻　五四五頁～五四七頁）

さらに、その発想については、「奇怪斬新常人の思ひ得る所にあらず」「露月鬼才あり」とその才能を認めたうえで、碧梧桐と虚子を対比しつつ紹介したように、佐藤紅緑と対比しつつ、「露月と壘を対する者を紅緑とす。一は沈黙。一は多弁」「性質に於て相反し俳句に於て相反す。然れども其句奇警人を驚かすに至りては両者或は似たる所あり」「露月は大に健に、紅緑は小に巧なり」（「日本附録週報」明30・2・22同前五五〇頁）と、個性を際立たせている。

このようにその才能を大きく評価された露月は、松山版「ほとゝぎす」の十三号（明31・2）から十九号（明31・8）までの選者となっている。

子規に称揚された露月は、次第に俳壇に認められるようになったが、上京した明治二十七年春から同三十二年十月までの六年足らずの間に、持病の脚気の悪化のため、六回も上京と帰郷を繰り返したのであった。そのため、子規と露月が直接親しく交友できたのは、わずか三十数ヶ月にすぎない（注4）。

しかし、この明治二十七年から同三十二年という期間は、子規の俳句革新運動が世間の注目を受け、軌道に乗って勢いを乗じていた時期であり、俳人露月にとっては、貴重な交流期間であったわけである。

露月は明治二十八年、医者に転じるべく医師試験を受ける。子規は初志を貫くように説得するが、露月の意思は固かった。明治二十九年十月内務省医術開業前期試験に合格し、帰郷。しかし、後期実地試験には及第しなかった。そのため東京に残り、医学の勉強をしつつ、句会や蕪村句集輪講に出席。明治三十一年四月、医術開業後期実地試験に合格。翌年八月医籍に登録され、十一月に郷里にもどり、開業医となる。

明治三十三年、秋田県能代在住の子規の弟子であった島田五空は、露月の帰郷を機に佐々木北涯と諮り、露月を主幹として「俳星」を創刊した。命名と題字は子規による。「俳星」によって、日本派の勢力が東北地方に今まで以上に広がっていくことになるのである。明治三十三年三月二十四日付露月宛子規の葉書には、「俳星といふ名に対して永続させてもらひたい」という子規の願いが記されていた。以後、子規の要請を受けて、「ホトトギス」の俳人たちが、「俳星」の支援を行うことになる。格堂もまた、その一人であったわけである。

二、格堂と露月

（一）『石井露月日記』を資料として

格堂が子規選の「日本」に初めて入選したのは明治二十九年、「ホトトギス」に投句して「募集俳句」の欄に名前が見られるのは、明治三十一年十一月号からである。直接子規に会ったのは、明治三十二年五月である。

よって、格堂が「日本」や「ホトトギス」に関わりを持ち始めた明治二十九年頃は、ちょうど露月が子規によって大きく評価されている時期であった。子規庵に格堂が通うようになったのは明治三十二年の五月からだが、その年の十月には、露月は郷里にもどっており、直接交流できた可能性のある期間は、わずかに五ヵ月である。

『石井露月日記』は、火事のため「日記」がところどころ焼失しているので（注5）不明な時期もあるが、明治二十九年一月から同三十三年の二月までは一部焼けているところがあるものの、大方は

残っているので調査した。ところが、露月によって記された格堂の名は一度も出てこない。さらに、三十三年以降も、焼け残った部分について調査したが、やはり一度も格堂の名は出て来ない。「俳星」に深くかかわり、三代主幹にもなった格堂に関する事柄が一度も『石井露月日記』に出て来ないのは不思議な思いがする。「露月日記」は、簡潔に事実のみを列記したもので、たとえば次のように、丁寧に人名と事柄を挙げている（一六九頁）。

明治三十二年一月

一日　晴、（旧暦十一月二十日）

諸人へ年始状、佐伝氏を訪ふ。浅草行き、散歩、そばや、夜に入る。

二日　晴、渓月を訪ふ、昼飯、酒、太古を訪ふ。晩食、同夜

三日　晴、虚子を訪ふ。昼飯、酒、子規を訪ふ。酒あり。

（二）「石井露月先生追悼号」（「俳星」）を資料として

それでは、格堂は露月をどのように書き残しているのであろうか。昭和三年十二月号「俳星」は「露月先生追悼号」であり、これに格堂の寄稿した「嗚呼　君子露月」を引用したい。

今より正に三十年前、私が始めて日本派の俳句に指を染めた頃

魯に大に諸侯を会す瓜茄子

白馬馬に非ずといへば栗はねる

といふ二句を読んで驚いた。勿論之は十八史略から出て来た材料であるが、茄子や栗を題として、斯くも面白き俳句を作つた其手腕の尋常ならざるに敬服した。之が抑も露月山人を知つた最初である。（十頁）

子規が「明治二十九年の俳句界」でも取り挙げ、「鬼才」とした（白馬馬に非ずと）の句に、格堂も驚嘆し敬服したのである。格堂自身も漢籍をはじめ、古典の素養が年少の頃から培われていたので、露月の作風に親しみを持ったものと考えられる。

さて、格堂が露月に会ったのはたった一回のみで、それは明治三十二年秋十月の根岸庵句会の席上であると記している。話しかけてきたのは露月の方で、次のように回想している。

第一回の課題もさつさと作つたらしく、誰よりも一番早く状袋へ入れて仕舞つて、坐を起つた。何うするかと見てあれば、其時縁側の方へ坐つて居た私の横へ来て坐り込み、『あなたが格堂君ですか、僕は露月です。』と初対面の挨拶を受け実に意外の感があつた。（十頁）

そして、さらに続けて「其後私は五空の俳星を応援した関係等で、直接顔こそ合わさないが常に親友のやうな心持で今日に及んだ」（十一頁）と述べている。

ここで、島田五空の名が見え、格堂と親交のあったことが窺えるが、この点については別稿に譲る。

露月に関する思い出として、格堂はさらに四点挙げている。

一つは、明治三十五年七月、格堂が卒業旅行として東北地方に遊んだ折、親しい五空や北涯を訪ねたときのことである。秋田に三・四日滞留した時に、一日河辺郡豊島村に友人の兄を訪ね、もしもその人が在宅であったら一晩泊まって翌日は露月を訪ねるつもりであった。が生憎友人兄は留守であったため、女米木に帰る巡査に、ここまで来たが都合があって秋田に引き返すことを露月に伝言してほしいと頼んで帰った。

「親友のやうな心持で」と前に述べつつも、五空や北涯のように是非とも会いたいと思う程の友人ではなかったことが窺える。

二つ目は、昭和二年の秋に五空と露月が京都に来た時のことである。格堂は次のように述べている。

五空は一生の思出に病後の私をも訪ひ、序でに伊予の松山に、子規の発祥の地をも見度いといふ。同じくなら露月をも伴ひ来れと切に同遊を促した。或は露月も来はせぬかと萬一を期待したが、遂に京都より吉野へ廻つて帰東して仕舞つた（十一頁）。

格堂自身も「萬一を期待」した程度であり、露月も岡山までわざわざ足を伸ばして格堂を見舞う気持ちもなかったのである。

三つ目は、格堂の活動に対する文芸的な支援についてである。格堂は大正二年に、「青年日本」と題する政治雑誌を創刊した。文芸欄も充実させようとしたもので、露月にも応援を手紙で頼んだ。ちようどその頃の「露月日記」が焼失しているため、露月の方の記載が全くないのが残念である。格堂は次のように記しているので、この折の格堂と露月の文芸的な交流は深かったものと考えられる。

時折露月一流の仙骨稜々たる感想文の寄稿に接し、社中皆之を珍とした。固より私一個の経営に属する寒手たる寒社であつたから、原稿料など贈ることは出来ない。偶ま山人が女米木文庫（注6）創立の挙あるを耳にしたから、社へ他から寄贈して来る新刊書を謝礼の印に送つてやつた。（中略）此雑誌は大に露月の気に入つたものと見えて、創刊後早速左の五絶二首を寄せた。

（中　略）

私は露月のたよりに接すると、何時も知己の感を禁ぜないのであるが、此時は殊に感泣した。魚龍萬里来とは山人得意の文句だが、其龍も今や雲を越へて遠く去つて仕舞つた、噫（十二頁）。

「青年日本」は大正二年二月に創刊された、赤木格堂主宰の青年政論雑誌である。子規が生前勢力を伸ばし、格堂が短歌の選者もしていた政治雑誌「国力」などをイメージして創られたものであろう。政論の他に短歌や俳句などの文芸欄もある。因みに、短歌は伊藤左千夫、俳句は松根東洋城が選者となっている。論客には福本日南、津田青楓の名がしばしば見られ、「ホトトギス」や格堂が「九州日報」の記者であった時のゆかりの人々が協力していたことがうかがえる。この雑誌の目次に、露月の名もしばしば登場している（この雑誌の目次は「ホトトギス」に、第二号（大2・3）から断続的ではあるが掲載されていた。しかし大正三年五月号を最後に掲載されていない。おそらくその後廃刊となったのであろう）。

秋田にて、青年団を組織し、農閑期には夜学会を開いて青年たちの知性を高め、心の交流に努めていた露月にとって、格堂の「青年日本」は協力するにふさわしい雑誌であったと思われる。その露月の心意気が格堂に伝わって、右のような文章となったものと考える。

四つ目は、露月の句風に対する評についてである。

子規の命名によって誕生した「俳星」であったから、主宰として露月がどのような選をし、どのような句を発表していたかが、子規にとって大きな関心事であったことは容易に推察できる。格堂は、子規の評をはじめ五空、虚子の評まで引用して、次のように述べている。

晩年の子規先生から、色々の露月の批評を聞いたが、其中で先生は露月が平凡味を解せないのを遺憾として居られた。昨秋

五空が東遊した時、五空も同じく此点を惜んで居た。明治四十四年頃、虚子が露月訪問の記を公にした中にも特に凡人主義を誇張して、暗々裡に此欠点を諷示して居たやうに記憶する。併し世に完人はない何人にも長所の反面に短所のあるのは免れざる所である。全体を総観して九十点を越ゆれば、偉らいと謂はねばならぬ（十三頁）。

晩年の子規の露月の批評としては、九月二十日の「仰臥漫録」（『子規全集』第十一巻四二七頁）が挙げられる。「『俳星』ヲ見ル」として、牛伴の選については「月並調ニ近キヲ嫌フ」、格堂の選については「未ダ俳句ノ品格トイフコトヲ知ラズト見エタリ」とある。また格堂の作については「遥ニ俗流ノ上ニ出ヅ　侮ルベカラズ」と評価。それに続く露月の批評が次に引用したもので、手厳しい。

露月選地ノ句ニ

草花ヲ見ツメテ鹿ノ憂寝カナ　某

トイフアリ　コレ位初心ナ句ヲ露月ハ得見ワケザルニヤ　露月モト鈍根、長ク工夫シテ漸ク一条ノ活路ヲ得タル者シカモコヽニ多少上慢ノ心起リテ復一段ノ進歩ヲ見ズ　平凡ノ趣微細ノ趣ハ未ダ全ク解セザルガ如シ　猶三折ヲ要ス

「仰臥漫録」は日記として描かれたものであるが、大正七年九月には岩波書店から刊行されているので、格堂は当然これにも目を通しているだろうし、当時、この日記の書かれた頃に、子規の病床を週に一度は訪れていた格堂は、直接この露月への批評を聞いていた可能性もある。

「平凡味を解し得ない」というのが、子規を中心とした人々の大方の露月の評であったようだが、露月の長所である「鬼才」ぶりを大きく評価していた格堂は、「全体を総観して九十点を越ゆる」として、露月を「偉らいと謂はねばならぬ」と高く評価している。

以上のように、引用した文献が、「俳星」の「露月先生追悼号」に寄稿されたものであったためということもあるが、格堂の露月に対する評価は、その作品に対してはかなり高いといえる。一方、その交流については、お互いにもう少し足を伸ばせば会える所にまで来ていながら、その努力をしていないところに、人間的なつき合いの程度の浅さが窺える。

（三）　明治三十七年の「俳星」を資料として

子規が明治三十五年に病没した折、岡山にもどっていた格堂はその葬式にも間に合わなかった。悲嘆に暮れた格堂は、明治三十五年十二月の子規追悼号「ホトトギス」に、〈秋風に悲しむ庭に立ちながら〉を発表した後、子規を失った悲しみのあまり、文壇から遠ざかる。

再び作品を発表し始めたのが、明治三十七年である。因みに、「ホトトギス」六月号には「夏雑詠」と題し四十二句、八月号には同じ題で三十二句、十月号には「秋雑詠」と題して三十九句発表。これに対する作品評はなされていない。

同様に、格堂は「俳星」五巻二号（明37・5）に「春百三十句」と題して発表したが、これに対して露月は次号の「俳星」に酷評を記している。

批評は平川へき、小笠原洋々、露月、五工の順で掲載されているが、目次には、「露月、洋々、へき、五工」となっている。露月が主幹なのであるから、本来ならこの目次の順で載るはずである。ところが、

露月の評が酷評で賞賛部分がないため、穏当な平川へきの評から掲載したのだと考える。露月評の直後に五工の評が掲載されているが、それは「絶賛」と言ってよい。編集長は五工であるから、彼の心遣いであろう。

露月の評は次のとおり。

作者みずからが淘汰をやらぬものと見えて、同じ趣向から出たらしい句が幾らもある。（中略）単純な配合だけに止まり、句法も亦一律で、最早飽かれはすまいかと思はれる（中略）惣評すると題は春季のだけで艶と云ふ方は多いが、其艶ならしめた痕跡が見えてゐる、要は垢抜けのせない感がある。以上は非難すべき方面について丈けの言である。他に僕の意を獲たる句は多くあるが、併し此百三十句の中には特に記すべき異彩がないと見た。（二十五頁～二十六頁）

百三十句もの大作に対して「特に記すべき異彩がないと見た」とは酷評であろう（注7）。「春三十句」の大作には、露月の指摘するように類想句も見られるが、たとえば次のような蕪村調の佳句も指摘できる。

鶯や賢人住める竹の中
喪に籠る徂徠が庭の辛夷かな
舷に鯛の鱗散る春日かな
鶯の深く隠れし椿かな
負け鶏や喉につまる憤り

二年近く俳壇から遠ざかり、意を決してもどってきた格堂に対する、露月の厳しい態度であった。その後格堂は昭和に入るまでは、俳論執筆者と客員選者として断続的に「俳星」に関わるのみで、俳句作品の発表は「俳星」に対しては控え、「ホトトギス」や「渋柿」に発表している。

明治十二年生まれの格堂に対し、明治六年生まれの露月。格堂が子規門に入門した明治三十二年には、虚子等と並び称されるほどの才能を開花させていた露月であった。格堂から見ればまばゆい存在であったであろう。しかし、明治三十二年の句会の時に一度会ったきりで、あとは子規の命によって、「俳星」の選者を務めるという間接的な交流にとどまり、深い親交には至らなかった。格堂にとっての露月は、尊敬はするものの心理的には距離のある先輩であったに違いない。

一方、露月からは格堂はどのように見えていたのか。明治三十二年から頭角をあらわし、かつて自分がそうであったように、後継者とみなされるほどの力量をつけて子規の身近に控え、子規の選の基準まで心得た格堂は、わずか五歳年下の才能あるライバルであったのではないか。子規から「応援」と称しながらも、「俳星」選者として参加してきた格堂に対し、心穏やかではないものがあったのかもしれない。子規直系の弟子で、最晩年の子規の信頼を最も得ていた格堂は、「俳星」の会員からも信望を得ていた（特に編集長の五工は格堂を心から信奉していたが、この点については別稿に譲る）。その格堂が百三十句もの大作を携えて「俳星」に復帰してきたわけである。「他に僕の意を獲たる句は多くあるが」と記しつつも、一句もその句を挙げることなく、批判のみで終った評には、露月の余裕のなさが窺えるのである。

このような格堂への気持ちが根底にあるために、『石井露月日記』には格堂の名はあえて記されなかったのではないかと推察する。焼失部分があるにしろ、格堂の思い出等や、格堂の「俳星」への関わり方から考えると、全く記載されていないのは不自然であろう。

このような露月の対応ではあったが、編集を担当する五工との深い友情につながって、格堂は断続的に「俳星」に関わり、昭和四年にはわずか八ヵ月程の間ではあるが、主幹もつとめた。格堂が主幹であったと推察される「俳星」昭和四年九月号には、「緑蔭閑語」中の「露月山人一周忌」として、次のような文章を記している。

（前略）山人の徳や山高く水長く、必らずや将来益々俳星の幸運に恵むに違ひない。（中略）露月山人は（中略）沈思黙考の人であつた。詩人味よりも哲学味の勝つた人、季節に例ふれば、秋の人であつた。（後略）（二頁～三頁）

露月の徳を讃え、性質を「沈思黙考」の「哲学味の勝つた人」と簡潔にその人柄を述べている。

また、格堂が亡くなる前年の昭和二十三年三月の「俳星」には、「白馬非馬」と題して、第二芸術論を批判する際に、次のように露月の句に使われた「白馬非馬」を用いている。

先師は当時の俳句が第二芸術に堕したるを嘆じて自から起つて範を示し、之を第一芸術に回復せしなり。先師の称する「月並」とは今の新用語第二芸術と同一意義なるのみ。俳壇固より盛衰を免かれず、其衰へたる時の作品を引用して、古来の俳句を、一概に非難するは当らず。往昔漢土に「白馬は馬にあらず」と立論したるものあり、今の第二芸術論も亦其亜流なるのみ。

露月山人に句あり

白馬馬にあらずといへば栗はねる（二頁）

「白馬馬にあらず」の句は、格堂が初めて露月を知った時に感服した俳句作品の一つであった。最初に抱いた畏敬の念を、格堂の方はおそらく終生持ち続けていたのだと考えられる。

おわりに

以上のように、心をうちとけて通わせるような交流は、残念ながら二人の間には存在しなかったと考えられる。

ただし、格堂の方は初めて露月を知って以来、畏敬の念をもって接していたと考えられる。明治三十七年に百三十五句の大作に対して酷評を書かれたことに対しては、格堂の思いのわかる文章が残っていないので不明だが、個人差があるものの、一般的には不快の念を抱くものであろう。子規が晩年に露月を批評して「平凡の良さを解せない」点を挙げていたが、露月の酷評を鑑賞眼の不足のためと受け止めていたのかもしれない。

昭和二年の秋病後の体を養っていた時に、京都まで来ていた五空と露月に切に同遊を促したにもかかわらず、露月は京都から吉野へ廻って帰東して仕舞ったところにも、格堂の思いと露月の思いの間に温度差のあったことが窺われる。

しかし、格堂が政治雑誌「青年日本」を主宰した時には、積極的な支援を露月は行い、これに対して格堂も、露月の創設した女米木文庫に本の寄付をして応えていた。この点に、青年育成に力を注いでいた露月の純粋な心情が窺われ、畏敬する露月からの支援に感泣する格堂の思いも理解できる。

格堂が「俳星」にかかわり続けた理由は、初代主宰の露月への友情ではなかったことが明らかであり、今後、島田五工など他の「俳星」会員たちとの交流を詳細に調査することが必要である。

（注）

（1）拙稿「子規をめぐる岡山の俳人たち―赤木格堂を中心に―」（「俳句史研究」第九号　平成十三年六月）参照。

（2）秋田県の俳人島田五空が佐々木北涯と図り、明治二十九年に日本派俳誌「ぬしろ」を刊行したが、明治三十三年に石井露月が帰郷したのを機に、露月を擁して「俳星」を創刊した。命名は正岡子規による。子規一門の協力もあって「ホトトギス」「宝船」とともに俳壇を三分する勢いを見せた。（『俳文学大辞典』角川書店　平成七年十月　七二五頁）参照。

（3）注（1）と同じ。

（4）『石井露月日記』（露月日記刊行会　平成八年九月）の和田克司氏の論文「石川露月と正岡子規」（七九一頁）参照。

（5）『石井露月日記』の工藤一紘氏の「露月日記解題」八二五頁～八二六頁参照。

（6）明治三十六年九月青年の知性を高める意図で、露月は「小さき文庫」を作りこれを「米女鬼文庫」と命名、全国の俳友、篤志家に本の寄贈を呼びかけ五年後には千五百冊に達した（『生誕百一三〇年記念誌　石井露月　目で見る生涯』石井露月生誕一三〇年記念事業実行委員会　平成十四年九月　二十五頁参照。）

（7）この点は、千葉三郎氏も『「俳星」明治版の軌跡』（北門文学会　平成十四年五月）の中で「やや辛口評である」（六九頁）と指摘しておられるが、「やや辛口」ではなく、「酷評」と感じられる。それだからこそ、五工は批評の順番を目次と変え、露月評の直後で格堂の句を絶賛したのである。

二〇〇三年　十月三十一日受付
二〇〇三年十二月二十五日受理